

Title	教会と政治
Author(s)	金, 明容 洛, 雲海・訳
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.58, 2014.11 : 237-254
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5318
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

教会と政治

金 明 容

洛 雲海・訳

序

かつて教会は靈魂を救う機関として考えられていた。教会が靈や魂を救い、これを天国に送ることが核心的な課題である。と見なす教会論を、救いの箱舟型教会論と呼ぶ。この教会論はすでに古びた教会論である。教会がこのような教会論を有している限り、教会と政治との関係は相対的に複雑とはならない。その理由は、国家が教会の宣教を妨害しない限り、教会と国家の間に大きな衝突は起こらないからである。しかし、今日の教会論は、神の国を中心とした教会論である。教会は福音を伝えるだけでなく、この世に神の国を建てなければならぬということである。地上に神の国を建てるという言葉は、本質的に政治的課題を内包するものとなる。政治、経済、社会、文化など、全ての領域において神のご意志と神の統治が具現されねばならないというような、神の国を中心とした教会論は、政治的課題と政治的衝突を予告する教会論である。最近では、韓国キリスト教界の一部でキリスト教民主主義を立ち上げ、キリスト教的理念を政治的領域において具現させようとする試みが本格的に起こりつつある。しかし、教会はキリスト教民主主義のようなものを作

り、キリスト教的理念を政治的領域において具現化させるために力を尽くさなければならぬのだろうか。

I. 教会はキリスト教民主党を作るべきであろうか^①

教会あるいはキリスト者が、キリスト教民主党を作るべきであろうかという問題は、その教会やキリスト者たちが生きていく地域の政治的状況と多くの関連がある。キリスト教世界と見られるヨーロッパにおいては、キリスト教民主党を作ることは大きな問題とはならない。しかし、韓国のような多宗教的な状況においてキリスト教民主党のようなものを作ることは簡単ではない。なぜなら、このことはまかり間違えば、宗教間の葛藤を深化させ、社会的危機をもたらす危険があるからである。韓国でキリスト教民主党が作られ、これが力を持つようになれば、信徒たちは仏教民主党を作ることだろうし、儒教的文化を尊重する人々は孔子民主党を作るということもあり得る。宗教ごとに自らの立場を代弁する政党を作ることになれば、社会的、政治的危機は深化することになるであろう。われわれは、宗教戦争の背後には人殺しの霊たる悪魔が働いているという点に留意する必要がある。悪魔は宗教間の葛藤を深化させ、宗教戦争を引き起こし、世界を危機へと至らせようとする霊である。宗教戦争は非常に危険である。今日の世界において最も大きな気がかりとなるのは、宗教間の葛藤が深まって宗教戦争が起こりはしないだろうか、ということにある。世界平和を創り出すべき教会は、このような危機的状況を事前に防がなければならぬ。こうした危機的状況を事前に防ぐべき教会やキリスト者たちが、先立つてこのような危機的状況をもたらし得る道に歩み行くことは、非常に多くの点で憂慮されるものである。

教会がキリスト教民主党のようなものを作るべきかどうかという問題において、われわれが留意すべきもう一つの間

題は、特定の教会やキリスト者たちが作ったキリスト教民主党というものが本当に神のご意志を反映するものとしてのキリスト教民主党なのであろうか、という問題である。韓国で最近立ち上げられたキリスト教民主党については、韓国のキリスト者たちでさえ、彼らが神のご意志を反映する人々であろうということに関しては懐疑的であった。万一、韓国で韓基総(ハンギョソ)が中心となつて、キリスト教民主党を作つたと仮定してみよう。NCC(エヌシーシー)側の人々がこのキリスト教民主党に対して非常に懐疑的となるはずである。その反対に、NCC側の人々がキリスト教民主党を作つたと仮定してみよう。韓基総をはじめとした保守的キリスト者たちは、これに反対するにちがいない。まず、われわれにとつて容易に知られることは、キリスト者全体の意志を代弁できるようなキリスト教民主党という名の政党を形成することは非常に困難だということである。このことは、キリスト教民主党に深い歴史のあるヨーロッパでも同様である。ヨーロッパにキリスト教民主党は存在するものの、そのうちドイツキリスト教民主同盟(CDU)はドイツの保守的な人々の意向を代弁する保守政党であつて、これがキリスト者全体の意向を代弁する政党であるわけではない。むしろ、ドイツのプロテスタントの内の多くの人々はドイツ社会民主党(SPD)を支持しており、一部の環境問題に深い関心を持つ人々は緑の党(Gruene)を支持している。それは、神のご意志はさておき、ドイツキリスト教民主同盟がキリスト者全体の支持を受けることも相当の距離があるということである。

教会やキリスト者たちが、キリスト教民主党を作る必要があるかという問題に関して、もう一点留意しなければならぬことは、政党というものが本質的には執権を目的とする権力志向的な構造を持つていて、この権力志向的な構造には、イエス・キリストの精神である奉仕の精神とそれが根本的に衝突する可能性が深く存在する。政党には、権力を勝ち取るためにキリスト教精神を甚大な仕方ですげ損する可能性が深く存在するのである。カール・バルト(Karl Barth)は、キリスト教政党がキリスト教の名を汚す可能性について、これを警戒しつつ批判した。クリストフ・ブルームハルト(Christoph Blumhardt)は、ドイツ社会民主党が神の国と深く関連しているものと信じ、そうした理

由からドイツ社会民主党に深く介入して活動した人であるが、その活動の中で彼はドイツ西南部ヴュルテンベルク州の同党議員として選出されたのであった。しかし、ブルームハルトはドイツ社会民主党に深く懷疑を持つようになった。その理由は、ドイツ社会民主党が神とは関係のない執権のために暴力的な活動をしていたからである。結局のところ、ブルームハルトは当選がほぼ確実であったにもかかわらず、次の選挙において同党候補となることを自ら拒否したのであった。こうした深い失望の中で、ブルームハルトは神の国が神によつて建設されるものであつて、人間によつて建設されはしないものであるという点を痛感するようになり、この偉大な精神を自分のところを訪ねて来た若い牧師カール・バルトに教えたところ、その教えは二〇世紀の新しい神学が太陽のように昇り行くための母体となつたのである。

II. 教会は政治的中立の道を進むべきであろうか

教会がキリスト教民主党を作り、政治を変えようとする試みとは反対の立場が教会の政治的中立論である。この立場は、教会は霊や魂の問題を扱う場であつて、この世的な事柄にあまり深入りすることは教会の正しい道ではないとするものである。このような立場は、歴史的に探つてみると、キリスト教神学がギリシャ哲学から影響を受ける中で本格的に発展したものといえる。そして、啓蒙主義的精神が発展しつつ政教分離理論が国家の基本的な理論となる中で、教会は靈的次元や私的次元へとその領域を後退させたのである。

教会の政治的中立論は、まず聖書の精神と衝突する理論である。旧約の律法は、すべて神の御旨を国家の法として定めようとすることを意図する法であつた。神の法を国家とは関係ない領域として、つまり特殊な宗教的領域としての教会という特殊領域においてのみ適用させようとすることは、旧約の精神とはあまりに遠く距離あるものである。「正義

を洪水のように／恵みの業を大河のように／尽きることなく流れさせよ」という預言者の使信は、国家の中に具現されるべき正義を意味するものである。旧約における神の法は国家の中で具現化されるべき法なのだ。

イエスの神殿浄化事件は、神殿を中心に行使されていた不義なる政治的・宗教的権力に対する抵抗であり、拒否であり、批判であった。イエスは神殿を強盗の巢にしている不義なる権力を批判しながら、苦難を受けていた民の仲間となっていた。イエスがお教えになった主の祈りは、神の国がこの世に具現されるべきことを教える非常に重要な祈りである。神の国が具現され、神の御ところが地上に成就するためには、地上の不義ある統治者たちは退かなければならぬのである。このような理由からして、イエスと当時の統治者との間には相対的な葛藤が存在したということは必然であった。不義なる統治者の仲間となり、豪華な食事を好んでいたキリスト教史上の数多くの教会指導者たちは、もはやイエスの道を歩んだ真のイエスの弟子とはいえない。イエスの弟子の道は、すでに旧約の預言者たちの中に真の姿を探し出すことができるのである。

Ⅲ. 政教分離理論は望ましいものであろうか

中世の理論は、大体において神政政治に則った理論であった。神政政治とは、神の統治を理想とする理念であり、現実には国家が教会の意志を奉じて統治する理論である。このような神政政治が成立する場では、異教徒は殺されるしかなかった。一五一七年に起こった宗教改革は、教会と国家の間に存在する多くの諸問題を新しく定立しなければならぬような状況をもたらした。ある地域に一つの宗教でなく、多数の宗教が存在するというような新しい状況が出現したのである。一五七二年、フランスにおいてサン・バルテルミの祝日の晩に起こった大虐殺は、ヨーロッパに驚愕的な状

況をもたらした。フランス改革派教会の人々が大量に虐殺されたその晩は、ヨーロッパの知性ある人々をして宗教と政治の問題を再び根本的に考えさせるものとなった。ジャン・ボダン (J. Bodin) の国家論は、まさにこのような状況において生まれた政治と宗教間の関係についての新しい理論であった。ジャン・ボダンによれば、このような大量虐殺を防止して信仰の自由を保障するためには政治と宗教が区分されなければならず、国家がある特定の宗教を奉じることはせずに中立的な立場を取る必要がある、また全ての宗教が共存し得るようにし、宗教を公的⁵⁾な領域で活動させてはならず、公的領域での権力は国家が行使しなければならぬという理論であった。

一六一八年から一六四八年の間に起こった宗教戦争は、まさに宗教間の葛藤がどれほど危険なものであるかということとを世界に知らしめる戦争であったし、また非常に大きな教訓を世に残すことともなった戦争である。この戦争を経験する中で、ヨーロッパの知性と言うべき人々は政教分離論の絶対的必要性を切実に感じるようになり、ついにこの政教分離論は望ましく発展した理論として次第に世において受容されるようになり、憲法においても一つの価値として場を占めるようになった。特に、米国においては、ヨーロッパの地で宗教的迫害に苦しめられたカルヴァン主義者たちが政教分離論を憲法における価値として強く確定させ、今日に至るまでその政教分離の精神は憲法が保証する国家的価値となっているのである。しかし、重要なことは、米国の修正憲法における政教分離論が国家の世俗化のための理論ではなかったという点にある。それは米国内に存在する多様なキリスト教諸教派を保護するための理論であった。すなわち、特定の教派が国家権力を行使して別の教派を迫害することを遮るための理論であった。米国を建設したピューリタンたちは、たとえ彼らがカルヴァン主義者ではあったとしても、ヨーロッパで自分たちが被った迫害を念頭に置きつつカルヴァン主義に基づいた国教のようなものを作ろうとしたわけではなく、全てのキリスト教諸教派が自らの信仰を理由に迫害を受けなくてもよいような、寛大なキリスト教国家を作ろうとしたのであった。ところが、歳月が流れ行くにつれて、この政教分離論は世俗国家の出現を保障するという、とてつもない問題を引き起こしたのである。

政治と宗教の分離は世俗国家の出現可能性を高めるものであるが、その可能性は米国ならびに多くの西欧諸国家の中で現在現れつつある現象である。もちろん、政治と宗教を分離させたからといって直ちに世俗国家が出現するというわけではない。ヨーロッパの歴史に見られるように、その過程は長い年月を要するのである。しかし、われわれが長い年月を経た今日という地点から振り返って見るならば、政治と宗教の分離が世俗国家を出現させ、さらには世俗社会の登場をもたらしたといえる。世俗国家と世俗社会の出現は諸学校を世俗化させ、文化を世俗化させ、それに続いて教会にまで影響を与えるものとなった。多くのキリスト者が教会から離れて行ったことは、世俗社会の出現と決して無関係ではない。われわれがイスラム世界において確認できることは、イスラム世界では政治と宗教が分離していないため、社会がイスラム宗教の影響を深く受けているということ、またイスラム教徒の離脱はほとんど見られないということである。宗教が政治を支配することは社会全般に対して宗教的影響を深めることができ、その宗教を継続的に強く維持することについても多大な助けを与えることになるのである。

IV. 再び神政政治の夢を実現することは望ましい対案であろうか

キリスト教民主党のようなものを作り、教会の影響を国家の中に実現させようとする考え方の中には、ある種の神政政治に対する夢が含まれている。キリスト教の価値観を法制化させ、社会の中にその価値が具現化されるようにしなければならぬとか、キリスト者が国家の要職を担うようにし、その力によってキリスト教的価値を具現化させなければならぬなどといった考え方は、一種の神政政治的な考え方である。米国のキリスト教右派が国家や社会の要職はキリスト者が支配するべきだと強調し、キリスト教国家としての米国が世界を支配するべきなのであって、そうなつてこそ

世界はキリスト教精神によつて支配されるようになるだろうと強調することも、やはり神政政治的な考え方である。

しかしながら、神政政治的な考え方が世を支配し、神政政治的な政治的現実がかなりの部分で具現されていた時代は、一般に肯定的には評価されていないでいる。カトリック教会が支配していた中世は広く暗黒時代と評価されているし、プロテスタントにおける神政政治について触れる際にまず言及されるカルヴァンのジュネーヴ市についての評価も、やはり肯定的なものとは言い難い。なぜであろうか。

神政政治が危険であるという理由を説明すれば、以下のようになる。

まずそれは、宗教的領域から言及するならば、神政政治は他宗教や他の信仰を容認しないため、他宗教や他の信仰を迫害しやすくなるということである。この場合、他宗教や他の信仰を持つ人々は、自己の宗教や自己の信仰を守るために殉教を覚悟するようになる。このことは殉教的な情況を引き起こすこととなり、はなはだしくはこうした情況によつて宗教戦争が引き起こされるようなことにもなるのである。このことは、宗教改革以後のヨーロッパの状況を考えてみるだけでも、その深刻さをよく知ることができるというものだ。このような点を勘案してみれば、政教分離理論には肯定的側面の多いことがわかる。

第二に、神政政治においては、無知であることが神の御旨に化けてしまう可能性が非常に高いことである。中世暗黒期は、科学に無知な教皇が科学を弾圧する中で引き起こされた危険な時代であった。ガリレオの裁判からも知られるように、天動説が地動説に勝ってしまうという危険、それこそ無知が勝利してしまうというようなことでもない危険が神政政治によつてもたらされる可能性があるのである。カルヴァンのいた当時のジュネーヴ市が歌や踊りを禁止したことも、やはり芸術の価値に関する誤った見解を持っていた教会が芸術を抑圧した例と見なせる。教会が持っている偏見が瞬く間に神の御旨にとつて代わつてしまい、そのようなものによつて社会が支配されることになれば、これにより招来される悪い状況は非常に深刻なものとなり得るのである。二〇世紀初期の米国では、保守的教会指導者たちの相

当数が女性にミニスカートをはくことを許さなかつたし、またキリスト者たちは映画館に行つてはならないとも教えたのであつた。

第三に、神政政治は説得によらない強要的政治となるが故に危険であるということである。神政政治は力に信頼する傾向がある。大統領や国家の重要ポストをキリスト者が占めなければならぬといった考え方の中には、力によつてキリスト教的価値観を世の中に植え付けようという意志がある。米国が世界を支配すべきであるという考え方の中にも同様の問題がある。それは、米国が有している力をもつて米国が世界を支配し、米国的な価値観を世界中に植え付けようとする意志のことである。このようなものは、イエスの道とは根本的に相違する考え方である。イエスは力をもつて世を支配し、力によつてご自身の御こころを貫徹させようとした方ではない。イエスはなぜ皇帝となれなかつたのかということ、われわれは深く考えなければならない。イエスの道は愛と奉仕の道であつたし、説得の道であつた。イエスは人に強要されず、説得することを願われた方であつた。キリスト教は強圧的宗教ではなく、自由の宗教である。もしもイエスが強要することを願われたとすれば、このお方の持つておられる全能の力によつて全てのことを成就されたはずである。強要によつて屈服した世界をイエスは願われなかつたという点に、われわれは留意する必要がある。歴史上現れた十字軍の戦争における多様な諸形態は、強要的政治を具現するための戦争であつた。このような十字軍の戦争は、その大抵の結果が否定的なものとして現れた。暴力と強圧は悪魔が使用する道具であつて、聖霊の道具ではない。いかに正しく見えるものであつても、暴力と強圧により物事を具現させようとすれば、悪魔的状况が引き起こされる危険がある。神政政治は上から下へと降りて来る力の政治である。イエスの道は、下から上へと昇り行く民主的な説得の道であるという点にわれわれは留意しなければならない。

第四に、神政政治はこれを批判する可能性が遮断されるため非常に危険であるということである。神の外はいかなるものも相対的であつて絶対的なものはない。それにもかかわらず、神政政治的情況においては有限なるもの、相対的

なものを絶対化する傾向があるのである。教会や教皇が語るからといって、それが真に絶対的なものだといえるだろうか。その上、この世的な経済問題、政治問題、軍事問題、文化問題、社会問題などについて彼らが言及するとき、その主張は真に絶対的なのだろうか。彼らの反対側にいる人々は全て悪魔であつて、彼らの絶対的な言葉に服従することしか許されないような正しくない人々なのだろうか。むしろ、彼らの反対側に立つ人々を通して、神の御旨が現される可能性はないのだろうか。

第五に、神政政治には神政政治を率いる主体的勢力の罪惡を深く考慮しない傾向があるが、これは非常に危険なことである。われわれは、中世の教会が墮落したことに深く留意しなければならない。彼らが神の御旨であるとして強要した諸々の事柄の中で、神とは全く関係なく自らの利益と関係していた事柄はどんなに多かつたことであろうか！米国のキリスト教右派の人々は、自らキリスト教的価値観を具現しなければならないと主張しながらも、実際には自分たちと米国の利益となる事をキリスト教的価値観とない交ぜにして強調することはなかつたと、彼らは果たして自信を持つて語ることができるであろうか？

V. 神の国は神が建設される

教会と政治という問題においてわれわれがまず言及しなければならないことは、神の国は神が建設されるという大命題である。神の国は罪惡に満ちた人間が建設する国ではない。執権欲に燃える人間たちは、神の国の敵でこそあれ、神の国の働き手ではない。執権に目がくらんだ政党もやはり、どんなに高尚な標語をもつて自らを覆い包んでいるとしても、神の国からは遠い政党でしかない。キリスト教的価値観をもつて自らを覆い包み、自らと自国の利益のために行動

しようとする人々もやはり神の国とはいかなる関係もない。

神の国は神が建設されるものであるが故に、教会の祈りが絶対的に重要である。バルトによれば、教会が国家のために行うことのできる最大の奉仕は国家のために祈ることである。祈る教会は、世のいかなる政党や政治団体にもまして神の国のためにいつそう大切なのである。教会は国家のために祈らねばならず、政治のために祈らねばならない。また世界平和と生命のために祈らねばならない。政治に対して無関心な教会は真の教会ではない。教会には、政治的領域において活動する悪魔を深く認識する能力がなければならない。戦争が起こり、テロが起こり、憎悪の心が燃え立つ世界は、悪魔に生け捕りにされている世界なのである。

ヒットラー (Adolf Hitler) が六〇〇万人のユダヤ人を虐殺し、第二次世界大戦を引き起こして五七〇〇万名が死に行きつつあった時、その背後には何がいたであろうか。人殺しの霊たる悪魔である。スターリンが赤の理念を前面に立てて二〇〇〇万を越す人々を虐殺した時、その背後には何がいたであろうか。人殺しの霊たる悪魔である。ポル・ポトのクメール・ルージュ軍が国軍の三分の一を虐殺した時、その背後に何がいたであろうか。人殺しの霊たる悪魔である。ヨハネによる福音書八章四四節によれば、悪魔は人殺しである。旧約に描かれたメシア王国の象徴を見れば、それは争いが無くなり、剣を打ち直して鋤とし、もうこれ以上戦争の練習などすることのない国とされていることは、神の国が政治的領域と深く結び付いているということを示明してくれるものである。しかし、大切なことは、このような国を作る主体がメシアであられるという点である。

神を除外して国家や政治の問題に言及することは最も重要なことに言及しないであることであり、それは根本的に誤ったことである。歴史の主は神であつて、歴史の栄枯盛衰は神の手にかかっているのである。祈る教会があり、神の言葉を告知する教会があるということは、正しい政治を実現するためにこの上なく大切なことである。今日の世俗国家は、すでに根本的な問題を有している国家である。教会の祈りを必要としない国家、神の言葉に耳を傾けない国家は、

すでに非常に危険な状態にある国家であるということに、われわれは留意するべきである。

VI. 神の国の諸類比

神の国は神が建設されるという大命題を、人は神の国建設について何もする必要などないものと理解してはならない。神は神の国のために働く人々を探しておられる。教会は神の国のために働く人材を養育し、世に送り出す機関である。教会は、自分や自らの集団の利益のために働く人とは違った、神の国のために働く働き人を養育し、世に送り出さなければならない。このような働き人たちは、まず神の御旨を教会において学ばなければならない。神の言葉に對する深い理解無くして、世の中で神の国のために働くことは不可能なのである。

神の国のために働く人々は、世の中で神の言葉の光に照らして、神の国の諸類比を探さなければならない。世に存在する政治的秩序の中にあつて、何が神の国に最も近いものであるか探さなければならないのである。神の国に近いものが無いときには、神の国の諸類比を自ら政治的領域において作り出していかなければならない。われわれは、民主主義が神の国の類比となり得ると言うことができる。なぜ北朝鮮は悪魔的状況から脱け出すことができないのであろうか。それは、かの地に民主主義がないからである。民主主義は、政治的領域において悪魔を追い出すことのできる聖靈の道具である。一九一八年に、米大統領ウィルソンは民族自決主義を叫んだが、それは政治的領域における神の国のために非常に重要な瞬間であつた。世界を植民地から解放することは、世界を支配する悪魔を追い払うことであつた。リンカーンの奴隷解放もやはり同様であつた。われわれは歴史の中に数多くの政治的領域における神の国の諸類比を見出すことができるのである。

世の中に存在する神の国の諸類比は、これがいつそう神の国に近づくようわれわれがこれを発展させて行かなければならない。民主主義を神の国の類比と見させても、民主主義が持つている弱点は多くある。民主主義は、現在までのところわれわれが知る中で最も良い政治的秩序ではあるが、依然として不完全なものである。世の中に存在する神の国の類比はあくまでも類比であつて、神の国それ自体ではない。われわれは世がいつそう神の国に相応しいものとなるようこれを発展させなければならない。最近、頻繁に言及されており、国連でも深く研究されつつあるガバナンス(Governance)⁷⁾は、民主主義の弱点を克服することのできる対案となる可能性がある。

教会の政治的責任は、一次的には神の国の類比を探し求め、また神の国の諸類比を作り出し、これを政治的領域において具現させることと関連している。教会は国家が世俗化するよう放置しておいてはならない。国家が教会から霊的栄養の供給を得られないなら国家は世俗化し、悪魔に生け捕りとされてしまうのである。政治的領域において神の国の類比を探し求め、神の国の類比を作り出して行くことは、その相当部分が普通の信徒たちの課題である。カトリック教会で言うところの平信徒司祭職は、このようなことと関連させて理解することができる。平信徒たちは世にあつて司祭の働きをしなければならない。世における司祭の働きとは、その働きが神の国のための象徴となることを意味する。

VII. 下からの神の民主主義

神の国を建設するための教会の道は、下から神の民主主義を実現する道である。神政政治という夢が上からの政治であるのなら、教会の正しい道は下から始められる。なぜ下から始めなければならないのだろうか。その理由は、上から始められることが一種の強要だからである。キリスト者たちが力を争い取つて自らの価値観を具現させようとするな

ら、別の価値観を持つ人々は途方もなく納得し難く、やりきれない状況に直面することになる。ややもすると、それは強制によりまるごと圧迫を受ける中で新しい生の歩みを始めなければならぬような状況というものであり得る。このような状況はとてつもない抵抗を呼び起こし得るし、社会的にであれ政治的にであれ、非常に危険な情況を作り出す可能性がある。われわれはこのことを、立場を逆にして考えてみる必要がある。もしも異教徒たちが政権を掌握し、自分たちの価値観をわれわれに強要するとしたら、われわれはどうしなければならぬだろうか。多くのキリスト者たちは、たとえ殉教しても自分たちの価値観を守らなければならないと考えることであろう。上から抑圧することは非常に危険であり、悪魔が働き得る場を準備することになるのである。

下からの神の民主主義は強要に基づく秩序ではなく、説得に基づく秩序である。真の力は強制によるものではなく、説得によるものであり、心から湧き出る力である。聖書に言及されている律法と福音の関係も同様である。律法はある種の強要法である。律法は決してわれわれを救うことができない。まことに力ある正しい秩序とは、福音によって始められる秩序である。福音によって始められる秩序は自発性に基づく秩序として、下から、心から始められるものなのだ。福音によつて言及される心の中に刻まれた法とは、私自身が愛する法のことを意味する。それは強要によつて与えられるのではなく、私自身が好み愛する何ものかなのである。

特定の教会が自ら正しいと考える政治的理念があるというとき、その教会はその理念を具現させるために努力しなければならぬ。しかし、その努力は徹底して強要とは違った仕方、すなわち対話と説得という仕方で行われなければならない。われわれは教会が正しいと考える諸理念や政治的諸類比というものは一つではなく、たいへん多く存在するという点についても留意しなければならない。保守的な教会が考える諸理念や政治的諸類比と、進歩的な教会が考える諸理念や政治的諸類比はかなり異なる。同じ保守的教会とはいっても、教会ごとに、また人ごとに、相当異なるものである。神政政治は異教徒だけを苦しめる政治ではなく、同じキリスト者までも苦しめる政治なのである。

保守的教会が権力を握り、自分たちの立場を強要することになれば、進歩的キリスト者たちはこれに抵抗するしかないような状況が現れることであろう。このことは、逆の場合についてもまた同様であろう。

下からの神の民主主義は、対話と説得を通じた正しい政治的道を探し求めて行く道である。特定の教会が持っている政治的理念や政治的諸類比は、この対話と説得という過程を通して成熟もし廃棄される。特定の教会がこの対話と説得という過程の中で、自分たちの政治的理念や政治的諸類比が廃棄される状況に置かれることになるなら、その教会は喜ばなければならない。なぜなら、自分たちの政治的理念や政治的諸類比が誤っていることが露わとなったからである。自分たちの政治的理念や諸類比を神聖化させるような誤りを犯してはならない。下からの神の民主主義は対話を通して住民たちを説得し、諸言論を説得し、諸政党を説得し、国家を説得する道である。神のご意志を政治的領域において具現させるとき、この説得という厳しい道に顔をそむけてはならない。説得の道が遮られたなら、さらに高い説得の道を再度探し求めるべきである。国家を説得できたなら、次は世界を説得する道を歩まなければならない。力をもってわれわれが有する政治的理念を他の人々に対して一次的に強要することはできよう。しかし、留意すべきことは、それは決して長続きはしないということである。真の力は下から出て来るのである。

教会はこの世とは異なつた理念と思想を有する共同体である。モルトマン (Juergen Moltmann) やハワーワス (Stanley Hauerwas) が言及したように、教会はこの世とは異なつた対案的共同体である。教会は政治的領域においてもこの世とは異なる対案を作らなければならない。神の国の光に照らして見れば、この世の政治的秩序には非常に多くの問題があるにちがいない。教会はこの問題多き政治的秩序を新しく作る対案を産み出し、世を変えるために世にあつて努力しなければならぬのである。ハワーワスが主張したように、教会の中でのみそのような秩序を作り、そこに安住するようではいけない。教会が作り出す対案は、明らかに世の中にあつても価値あるものであるはずなのだ。もちろん、この世が相当期間にわたつてそれを受け容れないことはあり得よう。しかし、教会は絶えずこれを世に向かつて説

得し、これを世において具現するために最善の努力を傾けなければならないのである。対話と説得という過程の中で教会の誤りが発見されるなら、教会は心から喜んでこれを修正しなければならない。教会は世の世俗化については警戒しなければならないが、世の人々を通して聞こえてくる神の言葉については、開かれた心を持ってこれに傾聴しなければならない。

VIII. 政治的殉教者などいるであろうか

政治的殉教者はいる。政治的殉教者とは、神の国を具現するために政治的領域で働いた結果、殉教した人を意味する。政治的殉教者に反対する人々は、有限なることや世的な事柄をあまりにも絶対化するものだという理由から、政治的殉教者というような概念は誤っているとといった見解を披露しているが、このような人々の大方はギリシャ化したキリスト教を信奉する人々である。彼らの主張は、霊魂の世界と関連した領域では殉教者について言及することはできても、この世と関連した領域では殉教者という意味は不当だということであるが、キリスト教を霊魂の世界へと追いやってはならない。聖書に示された神の国思想は、政治的殉教者の可能性に対して本質的に開かれている。教会の政治的責任は、政治的殉教者の可能性と本質的に関係しているのである。

モルトマンによれば、ロメロ大司教やボンヘッフアーは政治的殉教者である。福音を伝えるために殉教した人々と同様、これらの人々は神の国の福音のために死んだ政治的殉教者たちなのである。聖俗二元論は聖書の精神と多くの部分で衝突する。政治的不義を批判した預言者たちの例は、政治的情况が霊的次元を非常に強く持っているということをよく教えてくれるものである。こうした預言者たちの伝統の頂点にあつて殉教した事例としてヨハネの死を挙げることが

できるが、これが政治的殉教であることは明白である。

キング牧師も同様に政治的殉教者である。私にはまだ夢がある、と叫んだキング牧師の叫びの瞬間は、神の国のための聖礼典的な状況であった。その瞬間は、たとえ政治的領域の真只中で起こった出来事ではあったとしても、また一方で、聖霊によって用いられた神のための劇的な瞬間でもあったのである。

結語

神政治の道や政教分離の道、また教会の政治的中立という道は、どれも望ましい道とはいえない。教会の向かうべき正しい道は、政治的領域において神の国の類比を作り、これを発展させ、神の政治が具現されるように、下からの神の民主主義を具現することである。この下からの神の民主主義は、対話を通して住民たちを説得し、言論界を説得し、政党を説得し、国家を説得することにある。神の国は愛と奉仕を通して到来し、対話と説得を通して来るものであるが故に、権力を握り、力をもってキリスト教的価値を具現させようとする道をわれわれは捨てなければならない。そして、神の国は神によって具現されるものであるが故に、われわれは聖霊が共にいてくださることを絶えず切に願わなくてはならず、権力欲や支配欲を捨て、奉仕と愛の道を進まなければならないのである。

訳注

* 本稿は「長老会神学大学校金総長学術講演会」（二〇一三年二月一日、聖学院大学ヴェリタス館教授会室）の講演原稿の翻訳である。

- (1) 「キリスト教民主党」という言葉が使われる背景には、韓国において同名の政党を作ろうとする動きが見られ、実際にそのような政党が立ち上げられたという現実がある。
- (2) 韓国基督教総連合会の一般的呼称。いわゆる保守的キリスト者の連合会。
- (3) 韓国キリスト教教会協議会 (The National Council of Churches in Korea) のこと。韓基総に比べ、進歩的。日本のNCCJに相当。
- (4) アモス書五・二四、新共同訳。原文の直訳では「公法を水のように、正義を河の水のように流れさせよ」となる。
- (5) ここで「公的」と訳された言葉は、日本でも韓国でも一般に「公共の」と訳されるのが普通であろう。しかし、日本や韓国で一般に「公共の」と訳される public の訳語について、金明容をはじめとする韓国の「公的神学 (Public Theology) 研究所」グループの学者たちは、public に「公的な」という言葉を当て、これを用いることを提唱している。
- (6) 原文では興亡盛衰。
- (7) ここでのガバナンスとは市民参与型の包括的ガバナンスが考えられている。具体的には国連開発計画 (UNDP) の活動として推進されている「民主的ガバナンス」などをその一例として挙げることができよう。韓国キリスト教界では、教会もガバナンスの役割を担う存在として社会に貢献する必要性が議論されている。